

榮光

767号

2026年7・8月

日本基督教団
田園調布教会
伝道部発行

〒145-0071
東京都大田区田園調布
3-34-18
電話 03-3721-2811
FAX 03-3721-2814
<https://den-church.jp/>

徒勞をこえて

ル力による福音書

五章一〜七節

牧師 山北 宣久

ゲネサレト湖畔、そこには「夜通し苦勞しました、何もとれませんでした」と呟くシモンがいた。無駄、無意味、徒勞であることをいやというほど味わされた者に、イエスは舟に乗り、漕ぎ出すよう依頼したのである。

舟を講壇にして群衆に語るためであった。それだけでも疲れ切った者にとつては重荷に感ずるのに「沖に漕ぎ出して、漁をなさい」とシモンに主は言われた。

「いくら偉い先生でも、大工の子に漁のことが分かるはずないでしょ。付き合つてられないぜ」とシモンは思っただろう。

ところが、イエスの言葉には、従わずにはおれない何かがあった。「しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と彼は応答したのであった。(五節)

この「しかし」は自分の経験を絶対とする生き方から離れることを意味した。経験、そ

れは尊いものだ。でもそれを絶対化し、振り回すとなると、自信過剰や過干渉になりやすい。そして人に対して上から目線から「無理させて、無理をするなど、無理をいう」との次元に突き落としかねない。

シモンは自分の経験から、これ以上は徒勞に終わります、と暗に訴えた。「しかし、お言葉ですから」と言つて自分の経験より、主の言葉を優先させた。

夜通し働いたのに一匹の魚も取れず疲れ切つて網を洗っている、これは人生の縮図と思える。一生懸命やつても実を結ばず、努力は徒勞と疲勞のみを生み報われることがない。そして希望は失望に、願望は絶望へと変わっていく、それが人間の現実ではないか。しかし、そこにこそ主イエスは近づき「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われる。徒勞を越えて、新しい地平へ踏み

行かせようとなさる。この切り込んでくる主の言葉の上に立ち、もう一度挑戦してみようとする決断と冒険、それが信仰である。

「沖に漕ぎ出して」これまた象徴的な言葉だ。昔の訳では「深みに乗り出せ」となっていた。沖、深み、それは危険な場所である。浅瀬とちがつて自分の足で立つことができない。今までの経験、それまでの自分をもう一度顧み問い直させられる場所としての沖に漕ぎ出させられることにより、シモンは主と出会い自分を再発見させられる。

「しかし、お言葉ですから」、主イエスの言葉の上に立つた時、シモンは主客転倒を経験した。つまり主であると思つていた自分、客であると思つていたイエスが入れ替わる。

その時からシモンはイエスを「先生」と言わなかった。「主よ」と告白する(八節)。かくして獲れたのは魚ではなく、シモン自身であったと福音書は告げる。

徒勞に終わるやに思える人生、無意味に窮わまるかに見える人間の業、それを十字架と復活の恵みをもって裏打ちしてくださることを確認させられる。

パウロは述懐して語る。「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしつかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知つているはずですよ。」(コリントの信徒への手紙Ⅰ 一五章五八節)

私たちは徒勞を越えて逞しく生きる者とされる。それは主にあつて苦勞が無駄にならないことを知らされているからなのだ。

(二〇二六年八月九日 夕の公同礼拝)